

要 約

報告番号	① 乙 第	号	氏 名	小 口 芳 世
主 論 文 題 名				
Potential predictors of delay in initial treatment contact after the first onset of depression in Japan: a clinical sample study (わが国におけるうつ病受療の遅延に関する検討)				
(内容の要旨)				
<p>うつ病は著しい機能障害を伴う精神疾患であり、社会に重大な影響を及ぼすとされており、効果的かつ適切な治療が必要といえる。現在、うつ病に対する治療ガイドラインが、いくつか存在する一方で、多くのうつ病患者の受療遅延に関する問題が報告されている。これまでの先行研究より、うつ病未治療期間 (Duration of untreated illness; DUI) の短縮化は、うつ病の経過の改善と関連があることが示唆されている。しかしながら、うつ病発症後の受療遅延にかかわる因子についてまだ十分に理解されていない。このような背景から、本研究では、うつ病発症後の受療遅延を関連する因子を明らかにすることを目的に、うつ病外来通院患者を受療遅延長期群 (長期DUI群) および受療遅延短期群 (短期DUI群) における社会人口統計学的ならびに臨床特性を比較した。</p> <p>東京の3つの医療機関 (大学病院、総合病院、精神科専門病院) のうつ病専門外来を受診したDSM-IVに基づく大うつ病性障害患者 (n=95) を対象に、半構造化された臨床評価面接ならびに各種評価尺度を含んだ包括的な評価が実施され、その当該診療録が調査された。DUIは先行文献に基づき、患者のうつ病初回エピソードの発症から最初の抗うつ薬投薬開始日までの期間と定義した。対象者は、受療遅延期間が12か月を超える者を長期DUI群と、受療遅延期間が12か月以下の者を短期DUI群に分け、年齢、性別等の調査項目に関して、比較検討した。</p> <p>全対象のうち、DUIの中央値は4ヶ月 (25-75パーセンタイル値2-13) であり、全対象のうち72.6% (n=69) がうつ病発症の最初の1年以内に受診していた。多変量ロジスティック解析を施行したところ、長期DUIは、婚姻歴 (未婚) との関連が示された (95% CI 1.27-8.58, p = 0.01)。さらに、探索的解析にて負の2項回帰分析を行ったところ、DSM-IVのメランコリーとも関連が示された ($\chi^2 = 3.90, p = 0.048$)。</p> <p>本研究では、わが国のうつ病患者の多くは、発症1年以内に受診することが示唆された。これは以前のはわが国における同様の研究、さらにイタリア、ポルトガルにおける研究結果と類似している。これらの国に共通する点として、general physicianに相談することなく、直接、精神科を受診できるようなメンタルケアシステムとなっていることである。一方で、未婚とメランコリーの特徴が、うつ病発症後の受療遅延の潜在的予測因子である可能性が示唆された。この結果は、おそらく婚姻歴という因子によって介され、それは治療探索行動に重要な役割を果たすものと推測される。また、メランコリーの特徴を有するうつ病患者は、受診を渋るケースが予想でき、結果、DUIが長期化するものと考えられる。</p>				